

〔付章〕 西大寺食堂院の配置計画と建物の復元

本章では、「資財帳」に記載された建物と検出遺構との照合を基礎に、食堂院を構成する建物について考察する。なお、検出した建物の遺構は、大規模な礎石の据付穴や基壇縁の側溝などが中心で、いずれも造営の基準とした単位尺や方位を正確に算出する定点になり得ないため、ここでは単位尺を29.6cm、方位を真北として検討する。

(1) 「資財帳」から復元される建物配置

「資財帳」に記載された食堂院の建物と規模は2頁に示した通りである。「資財帳」からは、食堂院には「堂」や「殿」と称する中心施設となる建物が3棟、また厨と倉がそれぞれ2棟ずつ、それに建物をつなぐ軒廊と校倉造の倉があったことがわかる。こうした「資財帳」の記述から復元される建物配置については、これまでにいくつかの復元案(図45)が提示されている。これらの復元案について食堂院部分のみに注目すると、各建物の位置に若干の相違はみられるものの、区画の中央に「食堂」「殿」「大炊殿」の東西棟建物3棟を南北に並べ、それらの東西に南北棟の「厨」と「倉代」をそれぞれ1棟ずつ並べ、「双軒廊」を「食堂」と「殿」の間に、東西棟の「甲双倉」を「大炊殿」の背後に置くという配置が共通してみられる。

(2) 食堂院の建物配置

今回の調査成果と、これまでに検出されている遺構および既往の復元案より食堂院の建物配置を検討すると図46となる。以下、各建物について詳細を述べる。

食堂・殿・大炊殿 今回の調査では、食堂院の主要堂舎のうち殿(SB955)および大炊殿(SB960)とみられる建物を検出した。各建物の規模は、SB955が桁行約30m(100尺)、梁行約12m(40尺)、SB960が桁行約27m(90尺)、梁行約15m(50尺)となり、「資財帳」の記載と等しくなることを確認した。また、市12次調査では、食

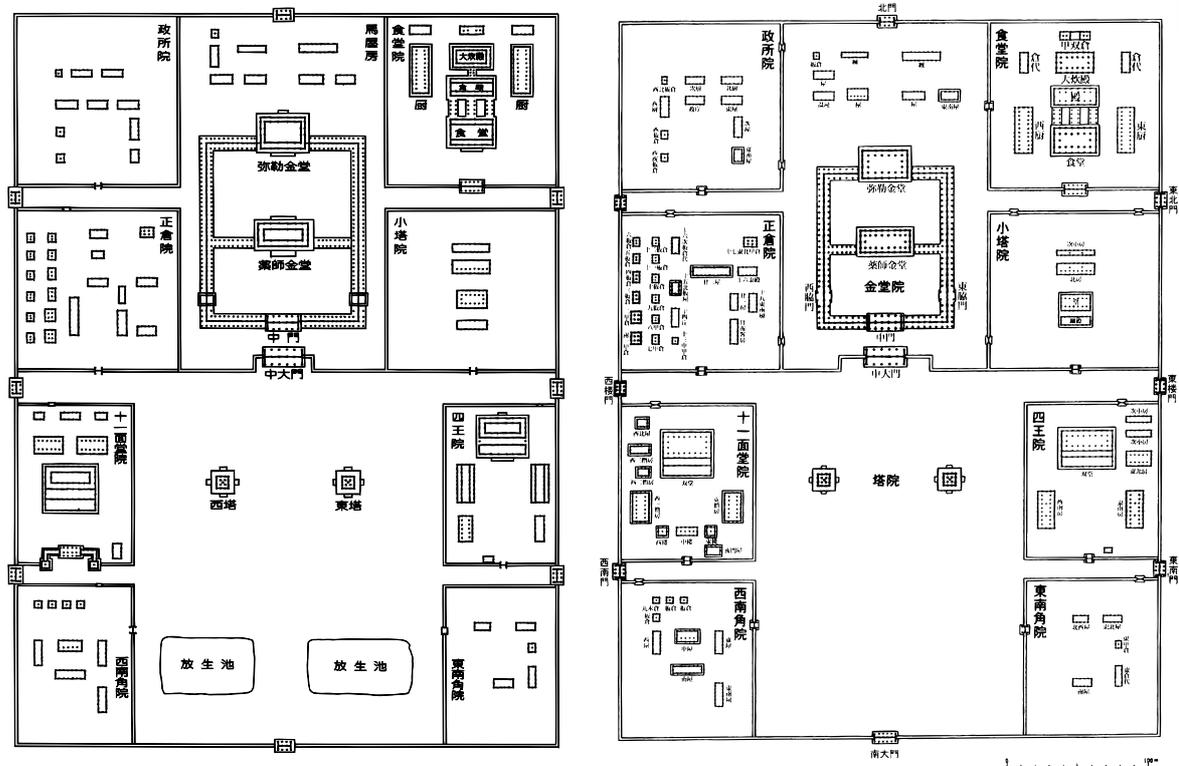


図45 既往の復元案

左：奈良市1978『平城京復元模型記録』

右：宮本長二郎1983「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『西大寺と奈良の古寺』より一部改変

堂とみられる建物が検出されており、SB960より推定される中軸で折り返すと、桁行約33m（110尺） 梁行約18m（60尺）となり、「資財帳」の記載と等しくなる。

これら食堂院の主要堂舎である食堂・殿・大炊殿は、中軸をそろえて南北に並び、各建物間の距離は側柱心々で、食堂と殿が41尺、殿と大炊殿が50尺となる。

軒廊・井戸覆屋 殿と大炊殿の間には、2棟を結ぶ軒廊（SC965）と井戸SE950を覆う井戸覆屋（SB951）が並び、軒廊と井戸覆屋はともに桁行約9m（30尺） 梁行約5.1m（17尺）の南北棟の建物である。軒廊は中軸上に、井戸覆屋は殿と東側柱筋をそろえた位置に建ち、主要堂舎と井戸が機能的に一体であったことをうかがわせる。このような食堂院における主要堂舎と井戸の配置には、西隆寺の食堂院との類似性を見出すことができ、両寺院の密接な関係があらためて確認できる¹⁾。

双軒廊 上記のような食堂院中枢部の計画的な配置から、軒廊西側の井戸覆屋との対称位置に、これらと同規模の建物がもう1棟並んで建つ可能性が考えられる。「資財帳」に記載される「双軒廊」が、従来の復元案にあるような廊が3棟並行するものであるとすると、軒廊と井戸覆屋、それに井戸覆屋と対称位置に想定される建物の3棟が「双軒廊」と同様の配置を取ることとなる。しかし、今回検出した遺構は「資財帳」に記載された「双軒廊」の規模と一致せず、同建物に比定することは困難である。よって、現段階では従来の復元案通りに殿と食堂の間に「双軒廊」を置くものとする。

東檜皮厨 今回の調査では、「東檜皮厨」に比定し得る明確な遺構は検出していない。しかし、殿の東側に取り付く東西塀SA952を殿と「東檜皮厨」を結び目隠し塀、また凝灰岩列SX935を「東檜皮厨」の基壇西辺に関わる遺構と解釈すれば、「東檜皮厨」は殿の東側、側柱心々間で41尺離れた位置に想定できる。また、「東檜皮厨」の南側柱筋を殿の北入側柱筋にそろえた位置に想定すると、「資財帳」記載の規模に従えば、北側柱筋が大炊殿の北側柱筋とそろえることになる。

甲双倉 SB970は、大炊殿の北側に位置することから甲双倉の南半部分に比定した。柱間寸法より、建物は桁行約19.8m（66尺） 梁行約6m（20尺）に復元されるが、「資財帳」の記載と規模が一致しない。「資財帳」に記載された「甲双倉」の規模は、総長で桁行69尺8寸（約20.66m） 梁行18尺4寸（約5.45m）であり、他の建物が丈の単位で規模を記すのに対して、「甲双倉」は寸の単位まで規模を記すのが特徴的である。これは古代において倉を検量する基準が斛法（倉内に収納できる体積値）であったことを考慮すれば、倉の内寸を記したものと考えられる。したがって、甲双倉における「資財帳」との規模の不一致は、倉独特の記載方法に起因するものと解釈することができよう。

しかし、「資財帳」の記載が「瓦葺」でありながら、遺構が掘立柱である点、双倉の類例には南北棟が多い点などをふまえると、SB970が「甲双倉」とは別の建物である可能性も残る。既往の復元案では、「甲双倉」は「大炊殿」北側の中軸上に想定されてきたが、他の場所に単独で建てられていた可能性も否定できない。この場合SB970は、たとえば食堂院北辺の回廊の一部など、「資財帳」に記載されていない他の建物を想定する必要がある。

北門 食堂院は一条北大路に面し、主要堂舎を並べる中軸にそろえて北門（SB975）を開く。北門の規模は、門柱心々間で約2.7m（9尺）の小規模なもので、築地塀あるいは土塀の一部を切り欠いて設けた棟門に想定される。北門は「資財帳」に記されないが、「資財帳」では各院の区画施設についての記載がないことから、省略したものと考えられる。遺構より、大炊殿の北側柱と北門（北側の境界）間の距離は約20m（69尺）となる。大炊殿と北門の間には甲双倉が建ち、甲双倉は大炊殿の北側柱心から約10.7m（36尺）の位置に棟通りを配する。

その他、「西檜皮厨」は、中軸に対して「東檜皮厨」と対称の位置に、「倉代」2棟は、それぞれ「東檜皮厨」「西檜皮厨」の北側に想定する。

(3) 食堂院の規模

食堂院の規模と一条北大路 既往の復元案では、食堂院は右京一条三坊八坪に位置し、敷地は1坪分の広さに復元されてきた。しかし、今回検出した食堂院の主要堂舎が並ぶ中軸は、坪の想定南北中軸から5丈程度東側にずれており、食堂院の南に位置する四王院の中軸と近い位置にある。このことから、食堂院は、四王院と同様に1坪に満たない敷地であった可能性が指摘できる。

また、今回検出した一条北大路の南側溝SD985は、東隣の右京一条三坊一坪で検出されている一条北大路の南側溝²⁾と比べて明らかに規模が大きく、溝心が約3m北側にずれる。これに合わせて食堂院の北限も想定される右京一条三坊八坪の北限より北側に出ている。このことは一条北大路が西大寺食堂院の東限と考えられる西三坊坊間東小路を挟んで様相を異にしていたことを示唆するが、西大寺の寺域、さらには平城京北辺坊の存在と関わる問題であり、既往の研究成果をふまえた上での総合的かつ慎重な検討を要する。

(4) 各建物の復元

殿・大炊殿・甲双倉の3棟について、柱間寸法より、各建物の復元を試みる。

殿 殿は桁行9間、梁行4間の建物で、桁行中央間を14尺と広くして、外側に向かって柱間を狭くする金堂式の柱配置を取る。桁行中央の両脇間が13尺、それより外側の柱間が10尺で、梁行の柱間は10尺等間である。このように、10尺の柱間が四周にまわることから、四面庇の建物に推定でき、また身舎の奥行が10尺等間と浅く、身舎桁行の両端間も同じく10尺であることから、屋根は寄棟造の可能性が考えられる³⁾。基壇の出については明確な痕跡をとどめないが、大炊殿と同じく5～6尺程度と考えるのが妥当であろう。

大炊殿 大炊殿は桁行7間、梁行4間の建物で、殿と同じく桁行中央間を広くする金堂式の柱配置を取る。桁行の中央間が16尺、両脇間が13尺、それより外側が12尺であり、梁行の両端が12尺、中央2間が13尺である。12尺の柱間が四周にまわるため四面庇の建物に復元でき、身舎の奥行を深くすることから、入母屋造の可能性が考えられる。基壇の出は、南北の基壇縁に延びる東西溝の存在から5～6尺程度であろう。また、礎石抜取穴などから凝灰岩片が出土することから、基壇化粧は凝灰岩であったと思われる。

甲双倉 甲双倉は桁行7間、梁行2間の建物で、桁行は両端の各2間が9尺等間、中央3間および梁行が10尺等間となる。こうした柱配置から、2間四方の倉を3間はなして東西に2棟並べた双倉を想定した。ただし倉部分は、桁行18尺、梁行20尺となり、「資財帳」の記載と比べて桁行がかなり短く、「資財帳」の「甲双倉」の規模を今回検出した柱配置に重ね合わせると、桁行の中心を揃えて間口の広い校倉をのせた姿となる(図47)。

校倉造は、束の上に井桁を組んで校倉をのせる構造であり、束の柱間と校倉の規模が必ずしも一致する必要はないが、現存する古代建築の類例になれば、やはり束の位置と校倉の規模が一致するのが望ましい。この点からも今回検出した遺構の性格については、食堂院全体の建物配置も含め、改めて検討する必要がある。

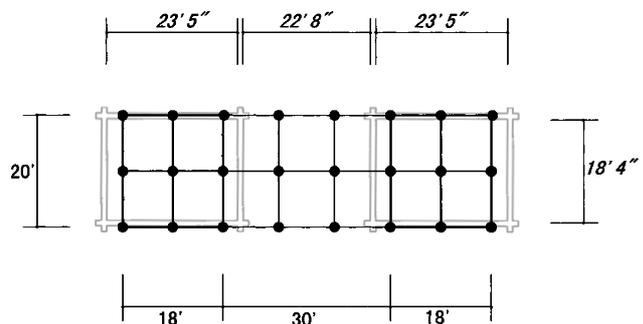


図47 甲双倉の検出遺構と「資財帳」の記載規模の対照
単位：1' = 1尺

1) 奈文研1993『西隆寺発掘調査報告書』。

2) 財元興寺文化財研究所2005『平城京右京北辺』。

3) 村田健一2000「奈良時代仏堂建築の平面(柱配置)と屋根形式」(『奈良国立文化財研究所年報2000 - 』)。